

追憶

花と鳥と歌と

目次

鎌倉の自然を眺めて

特に浄明寺近辺の滑川に

ついて

一九五六年

追憶（花と鳥と歌と）

一九七二年

思い出すままに（田辺校長をお徳び申し
上げて）

一九七四年

近頃考える事など

一九七五年

オレゴンを訪ねて

一九七五年

この夏の思い出から

一九七八年

札幌・苫小牧への旅

一九七九年

大島良乃先生へのお別れの言葉 一九七九年

最近読んだ本に寄せて 一九八六年

追悼 春日屋伸昌先生 一九九〇年

赤松さんと私 一九九一年

有坂先生の思い出 中野ノブ子

XXXXXXXXXX 村田佐代子

有坂言子年譜

参考資料

編集後記に代えて

鎌倉の自然を眺めて

特に浄明寺近辺の滑川について

買い物袋を提げ、庭の裏木戸から出て、滑川に沿って広瀬橋へと歩いていきます。一年三百六十五日歩き慣れているこの道を通りながら、ふと思い出しました。幼い日の思い出。今の私の家より少し川上によつた父の大きなわらびき屋根の家の木戸から出て、買い物袋ならぬ小さな竹籠を手に、滑川沿いに作られている田圃の道沿いに、土筆、たんぽぽ、すみれなど、小さい妹（注・簡子）の手を引きながら摘んでいきます。その田圃には今はすっかり家が建ち並び、お米や日用品など何でも売っている愛知屋さん、菅野の床屋さん（今はここより少し先に移っています）、八百屋さん、茶道の家元山田先生のお家と続き、伊勢の海さんのお家で道路が横たわり断続して滑

川上にと続きます。この田圃は河床面二米位の高さで、この田圃に平行して南側には一段高く畑が広がり、この広い平地は衣張山麓まで達していました。この畑地も田圃と同じように家がすっかり建ち並んでしまいました。この畑地の中の空き地は、お正月には子供達の格好の凧揚げの場所でした。

この何十年と歩き慣れているこの道を歩きながら、ふと考えました。この川沿いの小径は河岸段丘ではないかしら、と。そう思つて見ると川向こうの竹やぶの茂みを通して見え隠れする金沢街道もこちら側の田圃も対称段丘で、街道の北側にも一段高く段丘が続いているのが判ります。この段丘は滑川にかかつている犬かけ橋、広瀬橋、華ノ橋付近ばかりでなく、この上流の泉水橋方面まで二段ないし三段の段丘が形作られています。かつて第四紀のはじめ頃、川が流れていた氾濫原が次第に隆起し、現在

の地形が作られていったものでしょう。この滑川は、杉本観音下の魚屋さんの前からほとんど直角に曲がり、三井さんのお屋敷に沿って大御堂へと流れ、二階堂から流れてきた小川の水を合わせて鎌倉市の平坦部の東側に沿って、由比ヶ浜に注いでいます。十二所、浄明寺の辺の谷では深くV字型谷を作り、壮年期か或いは壮年期末期の状態を示しています。恐らく鎌倉市の平坦部ができた頃には、この平坦面上を幼年期の河川として深さもなく、低きについて由比ヶ浜に注いでいたことでしょう。それが長い年月の間に次第に浸食しながら掘り下げられていき、或いは関東大震災のような地殻変動に伴う地形の若返りもあつたかもしれませんが、現在のように比較的深い谷を形成していったことでしょう。

さて目を一度滑川から市の主要部分を形成している平坦面に移し、さらに三浦半島を作っている地形を水平的に見ると海岸線の屈曲状態も、三帯によって異なっています。南帯では東岸より西岸の方が湾の出入りが多く、中帯以北ではこれと反対に西岸より東岸の方が出入りが多くなっています。湾入の特に狭長なものは地質構造線と結びつけて考えられます。尚、この出入りは弱谷の現象を呈しています。これはかつて陸地の沈降作用が起こつたものと考えられます。これ以前に一時半島部に隆起作用が起こり、河川の浸食が活発となり、かなり開析された谷が生じた後に地殻の沈降作用が行われ、谷間に海水が浸入してこの弱谷が出来たものと考えられます。

次に、この半島の生い立ちについて考えてみましょう。恐らく第三紀中新生の初め頃（約千五百万年前）迄は、この半島は房総半島の一部と共に海底下にあり、その頃

全地域に移してみましよう。鎌倉市は半島の頸部に当たり半島は東南方に突出し、西側は相模湾に、東側は浦賀水道を隔てて房総半島に対し、その北部は東京湾に面しています。この半島を地形的に眺めると、北、中、南の三帯に分けられます。この三帯について調べてみますと、

一、北帯。逗子から横須賀を連ねる一線以北で、大体かなり開析の進んだ大地です。
二、中帯。西岸の秋谷、林、東岸の長沢に到る一線以北。この部分は半島の最後の所で、三列の小山脈がこの線に沿って走っています。即ち、二子山脈、大楠山脈、その南の武山山脈です。

三、南帯。中帯の南に接し、最高わずかに六十五米の低平な台地を作っている部分です。所謂三浦半島の海喰台地です。もし晴れた日に七里ヶ浜に立つて遙かにこの半島を望む時、この三帯の一大セクションを見

徐々に隆起して海上にその姿を現したものでしょう。その後同じ第三紀の後半（鮮新生）時代に再び海底下に没し、今日半島の各地で見られる砂岩、泥岩等の堆積物はこの当時堆積したもので、当時の貝、有孔虫、所によつては植物等の化石が見られます。

この当時の日本列島の海域は三浦、房総半島にとどまらず、大部分は海底下にあつたのでしょう。ところがその後この現在の半島が海面上に現れたのは第三紀鮮新生の後期（約百万年前）から第四紀最新世時口I層堆積前期であつたと思われま

す。この様にこの三浦半島の生い立ちを考えてみますと、昔、頼朝がこの鎌倉の地に幕府を開いたという「昔」という言葉も悠久の自然現象から見るとほんの瞬時の前のことに過ぎないような気がします。そして私の幼き頃の浄明寺の思い出も昨日のことではないで

この滑川の流れも三浦半島の山々も時々刻々に変わりつつあります。雨、風の風化現象による自然の地形の変化に加えて、最近の人力による宅地造成の地形破壊は目を覆いたくなるばかりです。美しい緑の鎌倉の山々がもうこれ以上に一晚にして無くなってしまふことのないようにと祈るばかりです。

(昭和三十一年(一九五六)鎌倉高等女学校第二十二回卒業生クラス会誌「年輪」)

追憶(花と鳥と歌と)

主人が心から好きだった鎌倉浄明寺の家、そして再び帰ることのないその家を後に、永遠のお別れの式、告別式へと雪の下の教会に参ります時、棺の中の主人は、自分で丹精込めて咲かせた真っ赤なチューリップに体全体を埋め、ほのかな笑みをたたえて居りました。

鎌倉雪の下教会の告別式の間中、主人の歌う「主よみもとに近づかん」の賛美歌が、カセットテープから静かに会場に流れて居りました。

自分で作った花に埋もり、そして自分で悲しみの賛美歌を歌う告別式は、真に有坂らしいものであったと、あの折の栄光学園のウルフ神父様が述べて居られた追悼の辞と共に、胸の痛くなる思いで今振り返ってみて居ります。

主人が亡くなってみて、我が家の庭には、春には春の、夏には夏の、そして秋には秋らしい花と、木枯らしの中でさえ真っ赤なサルビヤが、燃えるように庭中に広がり、霜のひどく落ちるまで咲き続け、四季折々に楽しいものであったことが初めて判りました。

大勢の子供を抱え、毎日家事に追われて、ゆっくりと庭を眺めている暇もない私の毎日であったとは申せ、今少しこの四季折々の花を愛でられることに対しての感謝の気持ちと、もっと心のゆとりを持っていたならばと、今更悔やまれることとございます。

さて犬や猫は飼い主の心が、よく分かると思しますが、鳥に主人の心が通っていたとは思っても見ないことでした。主人は本当に心から鳥達が好きでした。それも巻き毛のチャボだとか、金鶏鳥、雉と種類が多く、それらが多いときには百羽近くも居り

ました。

中でも一番大切にしていたのは金鶏鳥でした。日曜日など、ちよつと暇があるといつ迄もいつ迄も鶏小屋の前にじつと立って眺めていました。そんな主人の姿をよく見かけたものでした。この金鶏鳥が主人が亡くなると同時に、バタバタと倒れていつてしまいました。これを鶏小屋に見つけたときの気持ちは何とも言われないものでした。

それでも主人の亡き後、まだまだたくさん鳥共が残され、これをどうしたものかと頭を悩ませてしまいました。私共はこれから先、庭などない家に移らねばなりませんのでしたから。そしてあんなにかわいがっていた鳥共でしたから。チャボなどは常々十五年もかかって改良し続け、特別の毛並みをしたものを作りあげました。

クラス山下様方が、いろいろと心配なさって下さいました。それからしばらくし

て皆様方のお骨折りで、やっと鳥達の落ち着き先も見つかりました。早朝鶏のときの声も聞こえなくなり、鳥達の餌の分け前をもらいに来ていた数百羽の雀のさえずりも聞こえなくなり、次第しだいに静かになり、あんなににぎやかだった我が家の庭も主人を亡くしてシーンと静まり返ってしまいました。

やがて主人のお骨を大船のカトリック教会にお預けする五〇日祭がやって参りました。お骨を抱いて出かけようとした時、ガランとした鳥小屋に何やら動く気配が聞こえてきます。よく見ると一羽の金鶏鳥がもらわれ先から帰ってきているではありませんんか。「ご主人様のお骨のお見送りに間に合って良かった。」とでも言いたげな様子で。驚いて家中のものが鳥小屋に集まり帰ってきた鳥と再会しました。何キ口も離れている遠いところから、どうやってここま

で帰ってこられたのでしよう。鳩でもないのに。今もって判らない不思議な出来事でございます。

この鳥小屋のある私共の庭は、一木一草に到るまで主人が植えてくれました木や草花で埋まった、思い出多い庭、そして十年経ってやっと庭らしい庭になってきたところでした。この庭と、年中工作の鉄槌の絶えなかつた家と、鉄槌の聞こえないときには、珍妙な楽の音の絶えなかつたこの家を後に、私共は材木座に引越してゆくことになりました。

帰ってきた金鶏鳥は孫の手に抱かれて娘の市川の家へと出かけていきました。後には唯、薄紫の大根の花が、寂しく風に吹かれていました。

すべてのものが去って行ってしまった静寂な庭に佇んでいると、主人の手作りの楽器の音がはるか彼方から風に送られて流れ

渡り、それに合わせて楽しげな主人の歌声が聞こえて来るように思わず耳を澄まして聞き入ったことでした。

今頃主人は、かつて幾度となく行き来した南の島々の熱帯の木々の生い繁る中で、あの鮮やかな色の鳥達と天翔けめぐって居ります事でしょう。(S472.4)

五一物故者追悼号 海兵五十一期「あの海あの空」(昭和四十七年)より

思い出すままに

(田辺校長をお偲び申し上げて)

ゆくりなくも永年住みなれた鎌倉浄明寺の地を離れ、同じ市内でも南のはずれここ材木座に朝晩波の音を聞きながら、また再び教壇に立つことになって早4年の歳月が流れました。時折窓辺をたたく夜半の嵐に、老いの浅き夢も破られがちで「松の嵐よ波の音」あの校歌を眠れないままに口ずさんでみることも多い今日この頃でございます。

子育ての忙しい日々には思い出すこともまれだった校歌、そして楽しかった女学校時代のさまざまな思い出が近頃よくよみがえってきます。

朝夕校舎の窓辺から眺めたあの松林、その中に見え隠れする一の鳥居、そのすぐ下には畠山重保のお墓も望めます。目を移せば滑川。今は校舎も何もかも変わってはし

まいりましたが、松の木々や校庭に降りていく石段に昔のままの面影を残しております。

さて、創立当時の明治の頃から大正にかけての女学校は大変なごやかでその上明るい雰囲気は漂っていたと、どの先輩方も申されます。このことはよき平和な時代からくるものとは申せ、やはりあの田辺校長のきびしさの中にある温かさ、そして生徒への思いやり、御身をもって人間としてのあるべき姿を生徒に示された先生のご人格によるものと、今になってつくづくと思い知るのでございます。生徒に小言を言われたことはありませんでしたが、ご自分を律することに厳しく、しかも心から生徒を愛しておられました。生徒も規律を守り、秩序ある行動を自然にとるようになりましたのでしよう。私共の先輩の方々には実にのびのびと明るく、なおその上に他人を思いやる優しい気持ちを持っている方々が多く

おられました。

当時の鎌倉女学校は特に演劇が盛んでした。これはみな在校生の自主性に任されていました。思い出は遠く大正六年の頃私はまだ付属小学校の一年生でしたが例年の通り十月二日創立記念祭がありましてこの日も色々な演劇がクラス別にありました。

姉（注・文字）に見に来るように誘われて喜んで出る浄明寺から由比ガ浜の女学校まで出かけました。姉の出る劇にやつと間に合って会場に着いた時は丁度姉の劇の始まった処でした。出し物の「傾城阿波鳴門」巡礼お鶴が、あの巡礼姿で舞台に出てきたところでした。このお鶴は確か、姉のお友達の志和知さんとおっしゃる方ではなかつたかと思えます。姉の姿も舞台の右手に見られ、市松模様の着物を着ていたのが、なぜか印象的でした。やれやれ間に合つてよかつたと子供心にもうれしく、つくづく

と舞台を眺めたことでした。その他忘れられない演劇は女学校に私が入学してから見た「口蓮上人流罪の由比ガ浜の場」。由比ガ浜の舞台装置の立派さとこの劇の演出から

す時に大仏次郎先生が御逝去遊ばされた事は、日本の文芸史上ばかりでなく、私共教え子達にとりましては真にこの上ない痛恨の極みでございます。

主役まで一人でされた貝山シズ様（兵藤様）のすばらしい演技やまたその他当時鎌女の役者としての第一人者山本美寿江様（第十一回）の種々の舞台姿も忘れられません。当時の在校生は本当にのびのびと楽しくこの演劇のお稽古や、クラス全員が一体となつて舞台装置に、そして衣装の調達にと走り回っていました。そのような楽しい年毎の色々な行事も関東大震災による校舎の崩壊、それに続く復興事業の忙しさなどで次第に少なくなつてはしまいましたが、田辺校長先生の時代は年に何回となく催されておりました。

さて既に田辺校長は今ももう故人となられてしまわれましたが、先生は由比ガ浜の波の音や松籟と共に私達の心の中に永久に生き続けておられます。そして今は亡き前尚綱会会長小泉静子様が常に提唱されておられた「日本全国各地に、尚綱会の支部会結成を」との御声は今なお私の耳朵を打ちます。この事は、田辺校長の御心を心とする私共古い会員の心の結びつきによつて達成させることが必ずできると信じます。そして卒業生打つて一丸となつてこの事の達成に努力しなければならぬと思ひます。

既に当時の先生方も大勢お亡くなりになられて卒業生達が淋しい思いをして居りま

追記。この原稿の最後の項に鎌倉女学院のすぐ近くにお住まいの大島良乃先生の御

近況や逗子にお住まいの菊池若次郎先生の御事共記させていただきましたが、紙面の関係上カットされてしまいました。尚綱会の旧職員の御近況をこの「70年誌」を通してお知らせ申し上げようございましたのに真に残念なことございました。然も、大島良乃先生はこの6月（54年）御他界遊ばされてしまわれ尚なおこの思いを深く致しております。

鎌倉女学院七十年祭誌（昭和四十九年）

葉は、ひとめのあるときに心をつつしみ、態度をつつしむばかりでなく自分独りいるときにこそ慎む気持ちがなくはならないと云う言葉だそうです。この慎独という言葉は唯四六時中自分をつつしみ、小さくちぢこまっている、と云う意味ではなく、広大な天地自然の中に自分を置きおおらかな自然の中の座り方、おおらかな生き方、という意味だそうです。他人からほめられなくても凶に乗ることなく、くさされそして無視されてもおこりもしないで、微笑をたたえて悠々と座っている、という事なのだそうです。然しこの境地に達する、という事は本当に生やさしいことではないのです。

間もなくこの六月には六十五才を迎えようとしている今、振り返って考えてみると、私は何といつも周囲の人に悩まされ振り回され続けてきたことでしょう。こんな事ではならないと、我と我が身を叱りながら反

近頃考える事など

大勢の子供達が、狭い家の中にひしめき合っ
て暮らしている内に、長男が、長女が、次男が、そして次女が、それぞれによき伴侶を得て巣立って行き、下の男の子二人と私共二人と、四人になったと思つたとたん、思いがけず、主人は急逝し、ここ四年間、三人だけの生活となりました。そして、浄明寺から鎌倉の片隅の材木座に生活を移し、去年また一人の息子がアメリカに留学し、とうとう末の息子と私と二人だけになってしまいました。間もなくまた末の子が独立するようになると私一人だけの我が家となつてしまつてしまふでしょう。

それにつけて思うことは紀野一義氏の著書「禅」の中にある「慎独」という言葉です。鎌倉の円覚寺には、松下不昧公の書かれた「慎独」の書があるそうです。この言
省し一歩ずつでも慎独の境地に近づいていく努力をしていかなければならないと考えております。修養は死ぬ迄、と心に誓いながら歩き始めましょう。紀野氏はまたこの本の中で、井伊直弼の書いた「茶湯一会集」の一節の中の「独座観念」について語つて居られます。この言葉は深く私の心をとらえて離しません。井伊直弼もまた茶の湯でよく云われる「一期一会」について語つて居られます。

この人こそ語り合えると思う人、信じ合える友達と、一会の茶会を催し、香のただよう静かな茶室の中で抹茶を味合う。この茶室の中での心のふれあい、いのちのふれあいの充分になされた一日の茶会の終わつた時、尽きない名残を惜しみながら別れて行く。客は幾度も振り返りながら帰って行く。主人は客を送り出した後、静かに茶室に戻り炉前に一人座る。松風の音と共に茶

室の外を吹いている風の音を聞く。主人は茶会が終わって静かに去っていった友の心が、今なお自分の周りに息づいているのを風の音の中に聞く。主人は炉前に独座している。部屋いっぱい主人のいのちが広がっている。いや天地の中にいっぱい広がっている。この時に主人は、時間、空間を越えた世界の中にある。こうした独座こそが慎独の世界だと直弼は語って居られるのです。

大勢の子供達の温かい心に支えられながら、それに甘えることなく自分なりにしなければならぬ沢山の仕事を少しずつやり遂げていきたいものと近頃しきりに考えていることです。

終わりにこの因縁浅からぬクラスの方々、自分の娘のような気がする方々のやさしい御心に支えられて、苦しい時、悲しい時を乗り越え乗り越えて今日やっとここ迄来られた事を心から感謝申し上げますと共に、

皆々様のご多幸を深くお祈り申し上げます。

鎌女二九回生クラス会報(昭和五十年)

オレゴンを訪ねて

「クールな緑あふれる私の家、仕事に疲れた人は、どここの国からでも休養にいらして下さい。私の家、それはオレゴン州です。私の家の西の方には海、太平洋が果てしなく広がっています。東の方にはみ山波が続いています。カスケードの雄大な山波です。その山の中には沢山の火山や湖が点在しています。そしてこの山脈の中には谷もあれば砂漠地帯もあり、波状高原もあります。あなたがしばらく我が家オレゴン州に滞在してこの大自然に接したり、この家の人達としばらくでもつき合ってみると、この人達が何と温かい心の持ち主であり、しかも素朴な人達で彼らを取り囲む自然を心から愛しているかお判りになるでしょう。旅人はこのオレゴンから去りがたく、一日二日と滞在を延ばされるに違いありません

ん。

以上は当時(一九七五年)のオレゴン州知事トム・マツコル氏がオレゴン州の観光案内書の冒頭に書かれたものの要約です。マツコル氏は我が州オレゴンと云わないで、我が家マイホームと云って居られます。彼は自分の州とそして州の人々を心から愛しておられるでしょう。

本当にマツコル氏の云われるとおりこのオレゴン州は山はもろること、町の中にも緑があふれ、そして八月というのに日中でもセーターを羽織りたくなるようにクールな土地なのです。

さて、私は八月も半ば過ぎた頃、羽田を飛び立ち日本を後にしてハワイ経由でロサンゼルスに着き、サンフランシスコに二泊してからアメリカ国内線に乗り、オレゴン州北部の町ポートランドに着きました。

ポートランド、サレム、コーバリス、ユ

ーゾーン、グランパス等の町々は、西側の海岸山脈と東側のカスケード山脈との間の平地にできた北から南に点在する町々です。

私の目指す町コーバリス、息子のいる町コーバリスは、オレゴン州立大学のある学校によってできた学園都市で、本当に静かな清潔な町です。息子は自分の車を運転してポートランドまで迎えてくれました。胃潰瘍の手術をした病後の私は、次男に連れられて本当にやっとの思いでここまではるばるやって来ました。ポートランドの空港には日本を出たときと全く変わらない息子の笑顔が見えました。「お母さんはとうとうここまでやって来ましたよ。」

もう薄暗くなったポートランド空港を後にして先ほどあげた町々を通り、工業都市サレムの赤々と燃える工場の火を眺めたときはもうオレゴンの山々はすっかり闇の中に包まれてしまいました。フルスピードで

を一周して湖岸のロッジに着きました。車を降りて初めてその寒いのにびっくりして手にしていたコートを急いで羽織りました。なるほど坂道を上ってくる途中の山道の所々には夏、八月になっても解けない雪が点在しているのが見かけられました。

クレーターレークはカスケード山脈の南部にある国立公園の中にある湖です。この湖はカスケード山脈中にある多くの火山が噴火を起こした第四期の初期、現在この湖のある場所にその当時そびえていたと云われているマザマと呼ばれた火山が噴火を繰り返して、灰塵、軽石、ガスなどを長年に渡って吹き上げ、火山の側面に堆積して火口は次第にえぐられ陥没していわゆるカルデラと呼ばれるものができ、そこに水がたまり今日のクレーターレークができたと言われています。カルデラ湖特有の深い湖で、湖岸は切り立ち、一、二カ所を除いては、

三時間ほど走り続け、やっと静かな町コーバリスに着きました。ここを起点として息子の案内でオレゴン州各地のクールな緑あふれる大自然に接することができました。

さて、息子の車は突然急勾配な山道から緩やかな道に出たと思ったとたん、目の前に展開した藍色の広大な湖が見えてきました。太陽は今まさにクレーターレークの湖岸の切り立った山陰に没しようとする時、コーバリスの町から七時間の長いドライブを終えて私共の車はやっと湖岸にたどり着きました。息を飲む、本当に息も詰まりそうすばらしい眺め、刻一刻と湖面の色は薄紅い赤みを帯びた紫、そしてだいに紫紺から濃紺に、太陽は私共の為に山の端に沈むのを待っていてくれていくようです。車を止めてしばらくは時の経つのを忘れ、夕闇の中に没しようとしている湖に眺め入ったのでした。薄暗くなり始めた湖の周囲

湖岸に降り立つことはできません。この静寂そのもの、湖も地質時代には激しい火山活動があったことを湖岸の堆積岩が語っています。この湖の畔に大きなロッジがあり、このロッジの周りに二、三人がやっと泊まるくらい小さな山小屋が建ち並び、その中の一つを私共のその夜の宿にしました。木の丸太を縛り付けたような粗末な山小屋も、中はとても清潔で、その上スイッチ一つで暖房をとることができます。

さて、七時間のドライブで疲れた体を小屋の中に運び入れる頃、次第に周囲は霧の闇に包まれ、広大な湖もその中にすっぽり包まれてしまいました。眠れないまま小屋の窓を開けて外を見ると一面の深い霧でありは何も見えず、さっと霧は窓を通して中に流れ、たちまち小屋の中は冷たくなっています。

何時の間にやら深い眠りに陥ってしまい、

窓辺が白み始め深い霧の中から小鳥の囀りも聞こえ、どこから出てきたかりスも動き廻る頃やつと目が覚めました。この小屋が朝靄の中から次第に姿を現し始める頃、目の前の大きな口ツジに朝食をとりに出かけました。湖を眺められる食堂の一隅に席を取ると、昨夜それぞれに泊まった人達が次第にここに姿を現し始め、お互いに外国人同士が朝の挨拶を交わし、おのおののテーブルにつくとこの広い食堂も空席がなくなりました。セルフサービスの熱いコーヒーを飲み、バタートーストを食べながら目の前の湖に目をやると朝靄の中から次第に美しい湖が姿を現し始め雪をいただいた湖岸の山々に茜色の光が差し始めてきました。さあもう一度昨日暗くなつて写真が撮れなかつた湖岸に出かけてきましょう。朝の静かな風に細かい細かい波が湖面に打ち寄せその上に朝日が差し始め夕方の色とはまた

昇し始めます。オレゴンの山波、谷そして広大な緑の牧場よさよつなり。

空港の建物も次第に小さくなり始め、その傍らで息子はいつ迄もいつまでも手を振つて見送つていてくれます。突然熱いものが胸を突き抜け、涙で何も見えなくなったとき、飛行機はユージーン空に舞い上がり雲の中に入ってしまった。

マッコールさん有り難うございました。貴方のすばらしいお家を忘れることはできないでしょう。どうか、後に残った息子をよろしくお願いいたします。私は声にならない声を雲の下に向かって叫びました。

「付言」このオレゴン州訪問の拙い走り書きは、私が北鎌倉高校に勤めておりましたとき、帰国直後新聞部の生徒に頼まれ、時間のないまま大急ぎで書いたものですが、長すぎるとかで没になつてしまいました。

違ったライトブルーのすばらしい水の色、とてもカラー写真にはこの色は撮れないだろうと思ひながらしばしば見とれたことでした。去りがたい思いを残して昨日登つてきたカスケードの山の中の急な坂道を車は一気に下り、白樺の林の中から顔をのぞかせた子鹿にも車の前を走り抜けるリスにも別れを告げてこの湖を後にしました。

本当にわずか一週間のオレゴン州滞在でしたがオレゴン州の人々の温かい心にも接し、そして帰国しなければいけない日があつと云う間に来てしまいました。二、三日否一週間と延期したい心を抑えてコーバリスから南に来るまで一時間ほどの処にあるユージーン空港からシアトルに向けて飛び立つことになりました。シアトルには日本まで運んでくれるノースウエストの大型ジェット機が待つていてくれます。小型機は冷たい朝の空気をついてエンジンを回し上

それで、アメリカ行きの思い出にでもとアルバムと共にとって置いたものです。

それにつけても思い出すのはこのクレターレークに連れて行つてもらつたときもシルバーフォールに遊びに参りました時も、息子が道が判らなくなつて向こうから走つてくる車の人に尋ねたり、トラックの運転手さんなどに聞いたときも、とても親切に教えてくれ、別れる際にきつと向こうから大きな声で「サイナラ、気をつけて行きなよ。」と必ず暖かい言葉を残して走り去つていったことで、とても印象的でした。

コーバリス滞在中は息子の学んでいる大学の教授の家に泊めていただいたのでしたが、教授が夏休み中各地に講演に出かけられた後、私の息子が留守番を頼まれたのでした。教授が奥様と各地に講演に出かけられる前、息子は日本から母と兄が自分を訪ねてやつてくる旨申し上げました処、教授

の家全部を提供して下さったと云うことです。日本から来るお兄さんの部屋はここ、君は階下の電話のある部屋、お母さんには2階の一番よい部屋（教授と奥様のベッドルーム）をと、ちゃんと割り当て、廊下には必要なときには何枚でもとブランケットが積み重ねて置いてありました。衣装戸棚には鍵一つかけてないのです。

朝四時頃には早や東の空が白み始め寝室のカーテンを開けると広々とした美しい芝生の庭園が見え、そこには小鳥が囀り、白樺の林の向こうには茜色に染まり始めた空が見え隠れし、リスが木々の間を走り回っていました。この美しい朝の眺めとこのご家族の皆さんのご親切なお心遣いとはいっそもいつまでも私の心の中から消え去ることはないでしょう。

一九七五年夏

11の夏の思い出から

幹事さんから原稿のご依頼のお手紙を頂き、その中にお書き下さいましたように、滝田先生のご逝去、そして先の佐々木さん、前田さん方の御他界、真に痛恨の極みでございます。滝田先生が御病床にあられたときも、級友の御一人が病の床におられた折も、その後の御葬儀、またその後の御遺族の御慰問等々、とてもご想像申し上げますほどの至れり尽くせりの皆様方の暖かいお心を承りますにつけ、何一つして差し上げられなかった私自身を考えますと真に自責の念に耐えません。

滝田先生の御訃報はスイス、バーゼルの息子の家で、山田先生や笠井先生からの航空便で知りました。おみやげ話をたくさん持って八月中には帰国いたしますからと手を握り会ってお別れいたしましたのですが

・・・

さて、私が日本を発ちましたのは七月四日の朝、嫁の出産予定に合わせて成田空港から飛び立ちました。今回のスイス行きは、御産の手伝いが目的のため、あまり見物などできませんでしたが、ほんの一つ二つスイスの街についてお話ししましょう。

一、バーゼル

スイス西北のはずれ、東の方から流れてきたライン河が直角に曲がり、ドイツ、フランス、の境を流れて行くその曲がり角、ドイツ、フランス、スイスと三国が国境を接しているところにあります。重要な河の港として古くから発達した街です。この街に大きな教会（大寺院）があつて、二つのゴシック式の塔が空に向かって聳えています。この高い塔に登って町全体を一望してみました。若いジーパンのカップルが狭く

て暗い、そして急な塔の中の階段をどどん登っていきます。階段の上にも下にも、ばあさんは私一人、息子に遅れてはと、一心に登り詰め、やがて日差しの明るい塔の上まで出てきました。なるほど、ゆるやかに、ポリウムあふれるラインの流れがこの町の中を流れ、その向こうにはボージユ山脈、それより東に目をやれば、あの皆様方と一緒に地図をみたドイツの黒の森、美しいシュワルツワルトが望めます。ボージユ山脈に続いて、フランスとの国境の方には、ジュラ山脈が長く続いています。ライン川の左岸は、古いバーゼル。右岸は新しいバーゼルの町並みがみられます。

塔を降りてこの街に出てみました。スイスの他の街にもみられるように昔は城壁に取り囲まれていた街で、城門だけが所々に昔の面影をとどめて残っています。今思い出してみますと、毎朝のように出かけた市

れるのですが……。

毎朝早く、私が借りていたペンションから息子達のマンションまでの七、八分の道を歩いていきますと、七月というのに何となく肌寒く、然し朝の空気はとてもさわやかです。若者が車で職場に向かっていきます。若い娘さんが自転車を走らせています。そしてゆっくり職場に向かう中年、老年の人達もいます。しかも朝のラッシュアワーという感じはまるでなく、静かで落ち着いた風景です。ゴミ一つ落ちていない道をせめて私も急がずに歩きました。

二、ベルン。

七月の終わりに首都ベルンに出かけてみました。この街はバーゼルの南方、急行列車でオルテン経由一時間二〇分位の処にあります。スイスの街は大体、チューリッヒやジュネーブのように湖に面した街が多い

庁舎の前のマルクト広場の朝市も懐かしいところ。色鮮やかな赤や、美しい紫色の花々や新鮮な野菜あり、お魚あり、テント作りのお店でどの店の品物もほしいものばかりです。たくましい田舎風のエプロンをつけたおばさん達がニコニコしながらいろいろな種類のレタスや、美しいトマトを売っています。紫色や赤の野苺、野ブドウもあちらこちらに見えています。若いお母さんも乳母車を押して、老夫婦も手を取り合つて二人、三人、と連れだつたお婆さん達もみんなこの朝市に出かけてきます。バスケットの中にお野菜があふれると市場の前のコーヒーショップでゆつくりと若い人も老人もこの市場を眺めながら朝のコーヒーを楽しんでいます。息子が申しますのに、お母さんも年中せかせかとばかりしないで、せめてバーゼルにいる間中くらいゆつくりとのんびりとしていればと言つてく

のですが、このベルンはバーゼルと同じように川に沿っている街です。三方をアーレ河に囲まれ、丁度半島状になつた河岸段丘の上に発達した街です。ベルンの駅を降りて足をこの街に踏み入れると、とたんに何と静かな、そして中世の香りの街かしらとバーゼルにないものを感じました。華やかさはないが、何となく気品に満ちた町の感じ。駅前広場からアーレ河にかかっているニーデック橋に向かってこの街のメインストリートを歩いてみました。スイスはどこでも七月の終わりでも汗だくと云うときに、日中の町を歩いてもいくら汗ばむ位で、それほど暑いとは思われません。美しい町の両側に、この街を特徴づけているアーケードが見られます。このアーケードの下を歩き、ショッピングを楽しみながらゆつくりとあるく気分は最高です。

アーケードを歩きながらメインストリー

トに目をやれば、路面電車や車が走り、その所々にいくつもの噴水が見られます。この噴水は十五、六世紀に作られたものが多く、バグパイプ吹きや、アンナザイラー、食人鬼等々旅人を楽しませてくれるものが沢山あります。この噴水は、イタリアの素晴らしい彫刻と水の織りなす町の飾りと異なり、町の通りに、広場にひっそりとあるものが多いのです。噴水の下の方を美しい花で飾り、柱には彩色を施した浮き彫りが見られます。その上の方には、町の旗など持った騎士が立っている、そんなものが町にはよく見られます。この町もバーゼルと同じような大寺院があつて一〇〇メートルもの尖塔が市内のどこからでも見られます。やはり首都全体を一望するのは二五四段もの狭い急なそして暗い階段を登り、展望台に行つてみる事です。下から高い塔を見上げたときには、とても上までは登

れそうもありませんので、残念ながらあきらめてしまいました。ところがパンフレットをよく読んでみるとアルプスの連峰、特にアイガー、メンヒ、ユングフラウなどの白い巨峰群が望めるとありましたのでそれに惹かれてとうとう二五四段を登り切るこゝとができました。しかし、残念ながら山々は夏のもやに隠れ見られませんでしたが、古風な赤い屋根の町並み、アーレ河に取り囲まれている様子、この河にかかつている橋、ずつと下の方に緑色をした河のよどみ、浅瀬には白い波が立っています。やはりこの高い塔に登った甲斐がありました。さてスイスの町にはどこにでも博物館、美術館があります。この町にも優れたものがあります。しかし、短い限られた時間内にそれを見ることは残念ながらできませんので、今回は美術館だけを訪ねてみました。そしてヨーロツパの美術史の中で皆様と勉強し

たセザンヌ、マネー、ユトリコ、モジリア二、ピカソ等々中世から近世までの巨匠のものが沢山あるのに驚きました。ただただ残念なのは私の勉強不足で、たとえ時間は短くても、もっと有意義に過ごせたのではなかつたかと真に心残りのことのみでした。

この美術館の入り口には、熊の彫刻があります。そしてこの町を見渡してみますと至る所に熊の彫刻があり、絵あり、市の紋章も熊です。ベルンという町そのものの名前も熊から来ているものだそうです。愛すべき熊の縫いぐるみを日本におみやげに持つて帰ろうと求め、その大きな袋をぶら下げながら帰途についたときはもう夏の太陽も大寺院の下の方に沈み始めたときでした。

もう一つ皆様方にお話申し上げたいことは、長年の憧れの山、ユングフラウの頂上まで登山電車で行つたことや、その途中クライネ・シャイデックで降り、青空に聳え

るアイガー北壁や、ユングフラウの山容を仰いだとき、息を飲むとはこの事かと知つたこととございます。アルプスの峰峰に別れを告げ、帰りの車中の人となりましたとき、列車はいつまでもいつまでもトウーン湖岸を北に向かつて走り続けています。これこそ長年みたいと考えていた景観そのもの、心のカメラに焼き付けながら次第に空のかなたに消えて行く山々をいつ迄もいつまでも見送っていました。

筆をおきます前に、今一度皆様方の友情あふれる亡き友に捧げられた御心に心から感謝申し上げます、そして滝田先生、佐々木様、前田様のご冥福をお祈り申し上げます。

札幌・苫小牧への旅

「あなた有坂さんね、有坂さんね。」何
度も何度も小西さんはそういわれて私が遙
かなこの苫小牧迄やって来たことを大きな
感動を持って迎えて下さいました。両目を
真っ白い包帯に覆われ全く光の世界から遠
ざかっておられる人が最初にお出しになっ
た御言葉でした。

「この包帯が何時とれるかと云う事を主
治医の方にお尋ね申し上げ度いと毎日まい
にち思うけれど、細心のご注意を払って今
度の手術に当たって下さるので、差し
出がましくてとても伺えないのよ。」と話
される小西さんは本当に慎み深い小西さん
その方でした。

私のささやかな御土産の一つ鎌倉土産の
土鈴、それはかわいらしい童女の顔がえが
かれています。小西さんの掌の上にそれを

のせてさしあげると、小西さんはそれが土
鈴とお判りになりすぐに振ってごらんにな
りました。この鈴は私がここの苫小牧に来る
まで通ってきた山形蔵王の山の上でも、そ
して津軽海峡を渡る船の中でも私のハンド
バックの中で、かすかな音を立てていまし
た。

今、小西さんがこの鈴にふれられると鎌
倉の海の風が吹いてきてかすかな音を立て
ているようなのです。小西さんも私も、黙
ってこのかすかな音に耳を傾けています。
きつとこれをお聞きになりながらご主人様
と共に長く住まわれたあの横須賀線のガー
ド近くの小町のお住まいのこと、朝晩聞こ
えてくる本覚寺の鐘の音、横須賀線の電車
のゴーツという響きを聞いておられるので
しょう。それから小西さんは昔からいろい
ろな種類のハンカチを集められるのがお好
きのようでした。去年スイスで求めたハン

カチをお送り申し上げた処、「私のハンカ
チ好きをよく覚えていて下さいました
ね。」と、とてもお喜び下さったお便りを
いただいた事でした。鈴をベッドの枕元に
置かれ、私がお持ちしたハンカチに手を触
れられました。このハンカチは横浜元町の
近辺のもの。レースの縁取りとその周りに
小さな花が刺繍してあるもので、これをま
さぐり寄せられ、静かにさわって居られま
す。麻の少し冷たい感じのハンカチは小西
さんにはすぐどんな刺繍かお判り下さいま
した。

「時子さん（お嫁さん）のと同じものな
のよ。時子さんの薄い水色、あなたのは
真っ白なのよ。」と申し上げると、とても
とても嬉しそうになさって下さいました。

札幌から列車に乗り、千歳の駅を通って
苫小牧に参りますと、あの明るい初夏のラ
イラックの輝いている札幌とはうって変わ

りここ苫小牧の駅のホームには六月の初め
と申しますのに冷たい霧が押し寄せて来て
います。太陽は霧にさえぎられ、昼間でも
当たりは薄暗く冷たい感じなのです。思わ
ずコートのを立てました。然し私の乗っ
た列車の着いたホームには、御子息、一郎
様が居られ、列車から降り立った私をすぐ
に見つけて近寄ってきて下さいました。や
れやれ苫小牧までやって来たという安堵の
気持ちで長い旅の疲れも消えました。そし
て病院を直ちに訪れたのでございます。

小西さんがお疲れになるといけないので
第一日目はほんの短い時間の御挨拶だけ
にしてまた明日をお約束して病院を後にしま
した。いろいろの思いが交錯いたしました
が、私は十分といえるほど満足な気持ちで
した。

夜通し、霧でぬれたガラス窓を通して枕
を打った霧笛の音にさすがにホテルニュー

王子の第一夜は旅愁と申しましようか一人旅の寂しさをしみじみと味わいながらも、先ほどお目にかかってきた小西さんのとても明るいうお顔を思い浮かべ何となく心も軽くベッドに身を横たえました。

翌六月六日の朝八階の食堂から眺める海の眺めはすばらしく昨夜の霧はすっかり晴れ、フェリー発着地には早くも船の影が見え隠れし、沖にはスマートな外国船も静かにしずかに港に近づいてきています。この港を眺める食堂の窓際での朝のお食事。グリーンアスパラガスの柔らかくて美味しうございませうこと。熱いミルクもやっぱり北海道ならではのものでした。

この日の午前中にはこの町に居られる友人に案内されて町の西方にある支笏湖を訪れました。湖までの定規で線を引いたようなまっすぐな道路、その道の両側には白樺の林が続き、新緑がまた美しゅうございま

に花を咲かせて語り合ったことなど、どれもこれもしみじみと胸を打つ北海道の旅でした。しかし、明日の朝は早くホテルニュー王子を立たなければならぬという前日の夕方、もう一度小西様を野中眼科にお見舞い申し上げました。何かそうしないではいられない気持ち私の足をそちらに向けたのです。ああ、来てよかったです。そのときほど心に焼き付いた「今度の旅行の意義」はないと申しても過言ではないでしょう。もう間もなく御自分の目でご覧になっていただけるだろうと思ひ、白老のアイヌ村で求めた小さい紫色の花をつけた高山植物を手にして、御退院の折にはお家にお持ち帰りになっていただこうとした私の心は無になりませんでした。私が病室に入り、声をかけますと小西さんはいきなりご自分の両方の御手で私の手をしっかりと包んで「明日包帯がとれるようになりま

した。ここは夏というよりやつと春になったという感じでした。湖は昔若い頃訪れたときと同じ美しさで澄んだ水を湛えています。南に不死岳、樽前山、北に恵庭岳を望み見る事が出来ます。湖面から吹いてくる風は肌に冷たく、ここでもやつと春になったとの感を深くしました。午後からは昔の面影が全く無くなってしまった白老のアイヌ村を通り有名な温泉登別まで車を走らせていただきました。途中道の両側には内地の八重桜とも少し色の違う桜が咲いているのがあちらこちらで見かけられ、登別の熊公園のケープブルで登った山の上には鈴蘭も可憐な花をつけていました。

さて、春の息吹の立ちこめた若葉の山々に取り囲まれた支笏湖も、湿原地帯野鳥の宝庫ウトナイ湖も、そして50年ぶりの再会した友と宝石のきらめくような苫小牧港の夜景を見ながら幼い頃の鎌倉の思いで話

したのよ。そしてまた明日から起きてお手洗いにいけるのよ。」

何と嬉しく有り難いことでしょう。すぐにものがはつきり見えなくても、あとは眼鏡さえかければよく見えるようにならるし、私は明朝は残念ながら出発しなければなりませんでしたがこのことを今日伺えたことは何物にも代え難い喜びでございました。

「小倉遊亀先生始め報恩会の北鎌倉支部の皆様にごぞくれぐれもよろしく申し上げますと下さいませぬ。」と何度も何度も私がおいとま申し上げるまで繰り返されました。吉良さんや吉田さんに毎日毎日お手紙を見えない暗闇の中に書き続けているのよ。入院する前の事、そしてここに入ってから

の事を。」と話されます。ふと気がつくとな夕方の病院の御食事の間も近づいてきたようです。でも小西さん

は私の手をしっかりと何時までもおさえて離されないので。いろいろと胸の中の思いをお話になりたいこともたくさんあらわれるでしょうね。小西さん、何も言われなくても判ります。私は言葉にならない言葉を貴女に向かってお話し上げております。看護婦さんのもうそろそろとおっしゃりたげな気配に促され、それでも御手を振り払うように申し訳なく今少しという気持ちを抑えて尽きぬ名残を後にしてまた来年必ず参りますとお約束してお別れ申し上げます。

「どうか神様お願い申しあげます。早くお目が見えるようになりますように。」私は心の中で何度も何度も祈りしながら夕靄の中にうすれ行く病院を後にいたしました。

一九七九年五月末―六月初旬

おられました。決しておしゃれをされるのではなく、ご自身で洗い張りをされ、ご自分で縫っておられたお召し物でした。

私の生徒の頃はお子さま方も小さく、お手のかかる中から、どうしてもあのようにいつもきちんとして御清潔な御身なりを遊ばすことがお出来になられましたでしょうか。やはり学校でもご家庭の中でもあらゆるご努力を惜しまれなかつたからこそでございます。

もう一つ、いつも私の脳裏を去来するのは先生のお優しい微笑みを絶やさないお姿でした。それでいて、きびしくする時はきびしくされるので、先生の時間中いたずらをしたり騒いだりする生徒達は一人もおりませんでした。そのことは後で私自身教壇に立つようになりまして、このことがどんなにむずかしい事か思い知ったのでございました。

大島良乃先生への お別れの言葉

先生！御退院遊ばされてもう一度お話し上げようございました。もうこの御寺からすぐ向こうの鎌倉女学院の見えますお宅には先生のお姿を拝することはできません。痛恨の極みでございます。

恩師として、また先輩の同僚として、数々のご恩をいただいておりながら、何一つお報いできませんでしたことをここに深くお詫び申し上げます。

省みて、鎌倉女学校時代に思いを馳せますと、先生御自ら身をもってお教え下さいました御事どもが数限りなく浮かんで参ります。その中でも身だしなみをきちんとして教壇に立つという事でございます。先生はいつも仕立て下ろしの糊目の付いたお召し物を召され、半襟は必ず毎日取り替えて

その後、全校生徒に惜しまれながら鎌女を去られ、逗子の学校に行かれた頃は、日本はしだいに戦時色の濃い厳しい時代となつて参りました。モンペをつけて毎朝、駅に急がれる先生のお姿を大町のガード下によくお見かけ申し上げました。決まって先生の方から「体に気をつけてね。」とお声をかけて下さいました。私の方からこそ先生に申し上げねばならないことございましたのに。

ここ数年来、お宅にお邪魔させていただき思いましたことは八十歳を越されても実に記憶力にすぐれ、昔の鎌女時代の事どもも、そしてここ数年来の事も、実にはつきりと覚えておられる事でございました。昨日は誰さんと誰さんとが来てくれたと、とても嬉しそうに話されるのでした。

鎌女の卒業生の方々も、そして逗子の卒業生の方々も、いつも先生を訪ねられお慰

め申し上げる方々が絶えなかつたのはやはり「徳は孤ならず。」と申しますこととございましょう。

お玄関を開けて「先生」とお声をおかけ申しますと、「ああ！松沢さん、さあ上がつて。」と必ず、少し御具合の悪いときでもお玄関に出迎えて下さいます。おこたつの上にはいつもご子息民郎様の書かれた俳句のご本が開かれたままで、今までこのご本を読んでおられたのだと気づかれました。

去年の暮れからお正月にかけて、由比子様が御入院遊ばされた時は、おたづね申し上げると殊の外喜ばれ、「一人で寂しかったんだよ。」と申されたあのお声が今でも耳に残っております。

先生が身をもつてお教え下さいました数々の御事共を一つでも実行に移していく事が、お陰様をいただいた先生へのご恩の万分の一にでもお報い申し上げることと存じ

最近読んだ本に寄せて

昨日八月十五日は旧盆、里の両親兄弟姉の眠る大船フラワーセンターにほど近い竜宝寺にお参りに参りました。丁度昼下がり、真夏の太陽がキラキラと照りつけています。片手に手桶片手に菊の花束、水のいっぱい入った手桶が重く、本堂の前の桜の木陰にそれを置いて一休み。ふと見上げると真っ青な夏空の入道雲がむくむくと湧き上がっています。お寺の青銅の屋根瓦の上に。その時ふと昨夜拝見した「侍従長のひとりごと」の一ばん始めのページ、「空」と題して「壮健だった大勢の友がもうこの世にいない。我々もいつ死ぬか判らない。せめて生きているうちに年に二、三度はクラス会を開きたい。」と。そして「今臨終、という時に、この世に生まれてよかった、多くの人の世話になったがそんなに迷惑もかけ

ます。

先生、長いこと本当にありがとうございました。

大町の下馬四つ角を駅の方から参りまして左に曲がり、横須賀線の踏切の手前を右に入つて、急ぎ足で線路を左に見ながらよく通つたあの細い径、その向こうのお家には、もう先生はおられません。真に寂しい限りでございます。心からご冥福をお祈り申し上げお別れの御挨拶と致します。

鎌倉女学院元教員 有坂こと子

昭和五十四年六月二十三日

於延命寺（鎌倉） 告別式

なかつたし、楽しかった、と思つて死にたい。全てはあまりにも空しいもの、彼岸の墓参りの時こんな事を考えた。「この文章がふと頭をよぎりました。

私は今これから両親兄弟姉のお墓に参り香華を手向けようとしています。この静寂な人っ子一人いない広々とした境内、久しぶりで聞く蝉時雨。この中で今は亡き両親の事、兄弟姉達のことを思い、また私自身はこの墓地には入ることはできないけれどそんなに遠くない時に主人の眠る鎌倉瑞泉寺の近く、山ふところに抱かれた墓地に入ることになるでしょう、と。さて、年に何回となくお参りしてもあまり考えてもみなかったことを思うのは昨夜読んだ本のせいにか、それとも七十六才という歳のせいから。墓前に額ずきながら、又また頭をよぎるのは入江侍従長の流れるような筆の跡、今夜はもうやめて又明日に、と思いつつ自

然と目は次々とページを追っていく。

「天皇様の喜寿」の項目には「陛下のアメリカ御訪問ということが五十年三月に発表されその年の八月に御日程の細部が発表された。この事は日本の新聞には出たが、アメリカの新聞には一行も扱ってくれなかった。それなのに、いよいよ現地にお乗り込みになったら大変な盛り上がりであった。そして、決して一回以上は取り上げないと云う「ニューヨークタイムズ」が六日間連続トップに陛下の事を扱った。

御訪米から一年二、三年経った一昨年の暮れ、アメリカABC放送の日本駐在の人の話に「アメリカには世界中の要人が来訪する。その時は歓迎するけれど、全く一時的の事、ところがそこに行くとなると日本の陛下だけは全くの例外、一年以上たつた今日になつても一般家庭で夜の団らんの時など「あの心の優しい東洋のおじいさんは今い

あるウイリアムパークの空港にも、シカゴ郊外のバルツ農場にも、陛下を太平洋戦争の仕掛け人と考えて恨みを込めてにらみつけてやろうと思つて出ていた人があつた。ところがそれらの人は陛下のお姿を見て、これはあの戦争には無関係の人である、と言つたと云う。飛行機のタラップを、胸を張つたヒットラーのような人物が降りてくるに違いない、と思つていた。ところが全く異質の人に驚き入つた。そして等しくこの気よさそうなそして気の優しいおじいさんは戦争には全く無縁の人である。」と。この印象や感想はアメリカ人の全てに共通であつたらしくそれがころがりころがつてこの大歓迎の空気を盛り上げた、と。

この項目の終わりに侍従長はこう付け加えられた。

陛下の御訪米は昭和五十年より前でもいけなかつたし後でもいけなかつた。天の与

つたい何をしているだろう」というのが話題になつてゐる。こんな強い印象をアメリカ人の心に植え付けた人は陛下の外には一人もいない。」と。また、御訪問の中の章に書かれていたことで強く胸を打たれたことは、いよいよワシントンにお乗り込みのその朝、雨が降つて雲が低く垂れ下がつていた。ホワイトハウス前の歓迎式典の台の上にお立ちになつたときもまだ雲は厚かつた。それが陛下の御言葉が終わつたとたん密雲の中から一条の陽光がさつと強く射た。そして一瞬にしてまた雲の中に消え去つた。その時広場に居合わせた七千人ほどの大群衆が「アツ」という叫び声をあげた。今度のアメリカ御訪問中の一番一番大事な目玉の時に太陽の光が射した。この一瞬の陽光に全ての御訪問は象徴されている。」と。この御訪問についてのお話であるが、「後から聞いた話であるが、アメリカ第一歩で

えたたつた一度の機会であつたように思われる。陛下の御訪米と言うことはいろいろな意味からしばしば企画されたが、どの時も陽の目を見るまでには到らなかつた。もどかしいようなものであつたが、陽の目を見なかつたのはあの絶好の機会を熟させるためのためらひだつたと言える。そしてその後には全くそういう機会はなかつた。つまり御訪米というあの大行事は後にも先にも全くなく昭和五十年の秋でなければならなかつた、と。

私は自然に次々とページを繰り、夏の夜の蒸し暑さも忘れてしまつていた。さて、最後のページに御子息入江為年様の御言葉が載つておりました。

父が私に云つた言葉の中に「常に自分を控えめにして人より退いた立場で物事を見つめるような生き方を身につけなければい

けないよ。』というのがあった。そして、またあるとき私に独り言のように『人生の終わりの二、三年は流れ行く雲を眺めながらゆっくりと過ごしたいものだが、むづかしいのは寿命は逆算が自分ではできないことだ。』とも述べたことであつた。

真に日本相撲協会の春日野理事長の申されたように、去年9月27日に入江侍従長御急逝の報は全くの青天の霹靂、侍従長を直接御存知の方はもちろんそうでない方々も全くの痛恨の極み、深い深い悲しみをどうすることもできませんでした。もうすぐ侍従長の御職を辞められ、これからゆっくりとした余生をお送りになっていただきましたいと存じておりました時」。

しかし、侍従長の残されたこの珠玉のような御隨筆集、これをいつでも座右に置いて真に到らぬ事ばかりのこの老婆は事ある

追悼 春日屋伸昌先生

春日屋伸昌先生に私が初めてお目にかかりましたのは、藤井日達御上人様が昭和五十九年五月、ホテルオークラで御講演遊ばされたときでした。その折、先生は私のようなもののためにお忙しい最中わざわざホテルの入り口までお迎えいただきました。このお方が春日屋先生であられるのか、と恐縮のあまりご挨拶もできませんでした。多くの大学の先生方とどこか違っておられることだけは私のような頭の鈍い者にもすぐに判りました。唯温厚なお方と云うだけでなく、何か違ったものを持っておられるお方とお見受け申し上げました。

二度目にお目にかかれましたのは、平成元年十一月延子さんの「お釈迦様のお弟子達」の語り読みの会に伺ったときでした。延子さんは最初と最後の舞台に立たれまし

度に拝見させていただきたいと切に思うことでございます。

さて、終わりに臨みまして、第二十二回御卒業の皆様方がこれからいつ迄もいつ迄もお健やかにあられますように心からお祈り申し上げております。また、「侍従長のひとりごと」と題するご本を私にお送り下さいました卒業生の御方に心からなる感謝を申し上げてこの拙い文を終わらせていただきます。

昭和六十一年八月十七日

(年輪二号)

(注 「年輪」は鎌女第二十二回生の文集で、編集後記によれば第一号は卒業二十年、本第二号は卒業五十年)

た。延子さんが最後の舞台に立たれ、これが終わりました後で、控え室の日本間のお部屋の隅でご主人様が延子さんに話しかけておられるのを私は遠くからお見受けいたしました。

「よかつたね！本当にご苦労様！今日の鉄仙会に集まって下さった大勢の方々を支えにまたお書きなさい。私も見届けることができて本当に安心したよ。」と。

なんとすばらしい奥様へのお労いのお言葉でしょう。この御言葉で延子さんも長い間のこの会のご準備に心を砕かれたその疲れも一辺に吹き飛んでしまわれたのではいらつしやらなかつたでしょうか！本当にこうして奥様をどんな時でも心からねぎらっておられたご主人様、そして今度の「語り読みの会」の終わる瞬間までじつとその奥様の御演技を見届けておられるご主人様は何とすばらしいお方かとおつくづく感

じ入ったことでした。

その当時のご主人様はご健康そのものご様子であられました。それから三ヶ月後にご病気で倒れるとは誰も考えることができないことでした。

先生は「人類の絶滅という究極的な危機感が世界に広がるそのときにこそ初めて正しくしかも深く教えが流布するであろうと既に二千年前に釈尊は予言されたのであった。そして衷心より世を憂える人たちが心を合わせて真実の道を追求してやまなければ、やがて世界は光に道々足り走者会に変貌するであろう。」と述べておられます。先生はさらに「私たちは徒に失望してはならない。そうかと云って手を拱いて樂觀してもならぬ。志を同じくする人たちが手を携えて人間性の覚醒と回復とに努力しなければならぬ。この使命を殊に青少年の諸君が荷負するに耐えることを私たちは切

赤松さんと私

赤松さんが長い間住み親しんでおられた鎌倉は、申すまでもなく、源頼朝が鎌倉幕府を開いた地で、三方を美しい緑の山々に囲まれ、南には由比ヶ浜や材木座が広がっています。頼朝は、幕府を開くにあたってまず、町の南、材木座にあった鶴ヶ岡八幡宮を現在の場所に移し、この神社を中央の拠点として、幕府政治を始めたのでした。その八幡宮を起点として、海岸まで、約二キロの若宮大路が走っており、これと平行して、東西にそれぞれ一区画ずつ隔てて古くからある道があります。八幡宮に向かって右側が俗に言う辻説法の通りで、赤松さんは材木座のご自宅から毎日、八幡宮のすぐ東隣の神奈川県立鎌倉師範学校付属小学校に、この道を通って通われたはずで

に願う。」と強調されました。

先生のこの御言葉をよくよく玩味してこれを実現していかなければならないと心から思います。先生にはもつともつと親しくお目にかかりいろいろな心構えをご指導ねがい、そして仏の道に入りますことができましたらと存じておりましたが、それも叶わぬ事となつてしまいました。私は八二歳ともなり、あの世も近くなつて参りました。この上は先生の残された御言葉を日々かみしめながら余生を大切に過ごして参りたいと思うこのごろでございます。

(一九九〇年四月頃)

赤松さんや私もが学んだその付属小学校は、現在の横浜国立大学付属小学校で、今と同じ広い運動場がありました。当時の建物は関東大震災ですっかり崩れ、その後何回か立て直されて現在に至っています。

私もが付属小学校に入りましたのは、大正6年、卒業が大正12年、あの関東大震災の年の3月でした。明治は既に45年で終わり、それに続いた大正時代は、すべての方面に自由でのびのびと明るいついでした。この小学校でも、規則にばかりとらわれない、受け持ちの先生の判断に任せられた自由な教育が行われました。国語や算数の時間が、野外の植物採集や図画のスケッチ、そして山歩き的时间に早変わりして、今思い出しても楽しい学校の日々でした。

一、二、三年は男女共学でしたが、四年から別々の組になりました。私も女の子たちはいつも「あの方はすばらしく良くで

きるのですって。」とか、「とても走るのが速い方よ。」とかいろいろ言っては、尊敬とも憧れともつかない思いで隣の男の子の教室をのぞきに行ったものでした。赤松さんは女の子たちの注目の的でした。同級の男子の方々の中には、赤松さんのほかに、も後に大学教授になられたり、医学の方面に貢献されたり、現在も実業界で活躍されている方がおられます。

今手元にあります卒業記念写真は、八幡様の石段の所の、あの名高い銀杏の大きさを右手にして撮ったもので、男子生徒は大方紺の着物に袴をはき、羽織を着ておられ、すぐ赤松さんと判る懐かしいお姿です。この石段から見える太鼓橋の左右の源平の池には今と同じように、夏になると美しい白と赤の花を咲かせる蓮の花がよい香りを池の周りに漂わせていました。

暖かいこの土地では、早春からこの町を

取り囲む山々の切り通しや、谷戸の片隅に可憐なすみれが咲き、秋には到る処に野菊や水引草が赤い小さな花をつけています。この花達も赤松さんのお歌の中に出てくるもので、きつと水穂先生のお宅に行かれた折もこの谷戸の片隅に咲く野の花を愛でながら通われたことでしょう。また、赤松さんのお歌の中によく出てくる由比ヶ浜や材木座の海岸、そこには今はもうほとんど見あたらない桜貝が波打ち際にたくさん落ちていました。薄紅の美しい桜貝を赤松さんは散歩の折に拾っては大切に家に持って帰られたことでしょう。

その頃、赤松さんのお家には母君を始めそれはそれは美しい双子のお姉さま方がおられました。私が鎌倉女学校に入りましたときには4年生でした。やさしく美しい上に短歌に絵に優れた才能をお持ちでした。そのことは私の姉（注：嘉子）がこの御姉

妹と同じクラスでしたのでよく話しておりました。この女学校は由比ヶ浜に近く、時折学校まで波の音が聞こえてきました。赤松さんはおそらくこの浜辺で、春にはやさしい波の音を、夏には大勢の海水浴の人の群でにぎわう砂浜を、そして秋にはもう誰もいない静かな海辺に思いを凝らし、また、冬には荒々しい白波が立つ海の遙か沖の彼方に目を向けられておられたことでしょう。

もとより赤松さんは生まれつき科学に文学に非常に優れた才能を持たれた方と思いますが、この鎌倉の自然が、物事を静かに奥深くそして厳しく考える力となり、それによって化学の研究に、歌に、絵に、そして音楽にとあらゆる方面にすばらしい花を咲かせられたことと思えてなりません。

私共は、付属小学校を卒業して、中、高、大学へとそれぞれに進み、社会人となつてからもクラス会を持ち続け、今日に至つて

おります。赤松さんは大学院を出られた後も化学の御研究を続けられ、大変お忙しかつたにもかかわらず、よくつとめてクラス会には出席されておられました。アメリカに2年間出張され、帰国された直後、この会に出席され、アメリカやその他の国々について話されておられたお姿を思い出します。それから年月が経ち、岡崎の分子科学研究所におられた頃にはさすがに欠席されることが多かつたのですが、その頃クラス会の世話をしておりました私にお手紙をくださり、「何とかして時間を作り出席するようにしますから。」とのお知らせをいただき、たいそう嬉しく有り難く拝見したことがございました。亡くなられる数年前、パーキンソン病にかかつておられる時でしたが、「座るのも腰掛けるのもつらい。」と申され、クラス会ではいつも立ったままでおられたお姿を思い出します。そのお姿

を拝見して、なにやら切ない思いでございました。

私どものクラス会の中に東慶寺の御住職、井上禅定さんがおられ、よくこの会の面倒を見て下さっています。赤松さんの御葬儀はその禅定師のお取り計らいで、鎌倉の浄智寺でしめやかに執り行われました。その日はとても冷たい日で、冬の風が鎌倉の山の彼方から悲しい音を立ててこのお寺に吹き下ろしておりました。心からご冥福をお祈り申し上げて筆をおきます。

「追憶 赤松秀雄」(平成三年五月十日発行)より

有坂先生の思い出

高女三十四回卒 中野ノブ子

年も改まった四日、有坂先生の「お別れの会」に出席させていただきました。澄み渡った冬空が、なぜか切なく心に映りました。

会場には、ドボルザークの音楽が荘重に流れ、リバス司祭様のお説話を伺いながら、「お別れの会」は丁重に執り行われました。お身内の方々と、先生をお慕いする知人や生徒の参加によるものでございましたが、まことに上品で清々しく、先生のお人柄にふさわしい会であったことに感動いたしました。

お声をかけてくださいました万里子様から感謝申し上げます。

お身内の皆様、とりわけお孫様方にはそ

れぞれに有坂先生の面影が偲ばれまして、お若い頃の先生の思い出が切々と甦えり、懐かしさでいっぱいになりました。

六十年近くもさかのぼる昔
鎌倉女学院の教室で・・・

「起立、礼、着席」? のあと。

有坂先生は無言で板書を始められました。教室の中は、水を打ったような静けさです。

一七八九年 七月十四日
フランス革命

先生はブルーの半袖のセーターに、ベネチアングラス風の、楕円形のブローチを胸元につけられ、黒板を背にして静かにお講義が始まりました。

洗練されたファッション、透徹した眼差し、そして毅然としたお姿に、「すてき!」とぼんやりしている間に授業はどん

どん進められていました。

民衆によるバスチーユ牢獄の襲撃と解放、ギロチン、王朝の滅亡の様子等、淡々と、時には情熱的な先生の語り口に、生徒は声もなく引きこまれたものでした。先生の瞳は、遠くフランスへ向けられているようでありました。でも、先生の眼線の先には磯の音をのせた風が、木々の梢を渡っておりました。

そんな生徒達のがれを集めていられた先生は、私達の卒業を待たず、当時の先生方や、生徒達に惜しまれつつ、学校を退職されました。先生はご結婚されたのでした。

なぜ？ 今なの？ それに私達を残して・・・と思いましたが、先生は、とても大きな人生の選択をされたということを、他の先生から知らされました。

先生は和服を着ていらつしやいました。あの鎌倉女学院時代、きりつとして颯爽と教壇に立たれたご様子とは全く異なった新しい魅力にあふれた先生が、そこにいられたのでした。

赤ちゃんをお産みになられたばかりの女の方がもつ、不思議なみずみずしい魅力に溢れていられました。こんなに美しくて、お幸せそうなお姿にお目にかかれたのは、鎌倉女学院の生徒の中で、きっと私一人だろうと胸を張りたい位、嬉しい気持ちになりました。

先生のお幸せそうな表情に私まで幸せになりました。そして先生は小学二年生のお子様（注・邦彦）の教室へ、私は自分の教室へと向かったのです。

（奇縁と申しましょうか。先生のお子様と私の妹は 同じクラスでございました。妹の話では、有坂さんは稀に見る秀才でい

先生のお授業の名場面の数々は、深く私達生徒の心の中に生き続けました。

そして、その昔、ローマのカエザルが「さいは投げられたり」という名言を残してルビコン河を渡った・・・とお話された先生は、ご自身の人生にも大きな区切りをつけられたのでした。

それより数年が経ちました。私は、第一小学校の教師となっていました。かわいい、小学2年生の担任をさせていただいておりました。

ある授業参観日、教室へと向かう途中の廊下で、有坂先生にばったりお目にかかったのです。それは、数年ぶりの再会でした。どうにもならないほどドキドキしました。

「先生！」と申し上げたきり嬉しさで言葉が続きませんでした。

先生は赤ちゃんを抱っこされていました。

られたと言つことでございます（

それからさらに四十有余年後

先生は傘寿を迎えられ、私達は還暦となりました。

その年のクラス会の幹事に私も加えていただきました。傘寿のお祝いを何にしようかしらと、幹事一同考えました。

「傘寿なので傘はどうお？それに先生は、グリーンがお好きなので、グリーンの傘は？」

何という単純な幹事でしょう。お祝いの品は表がグリーンが無地で、裏側は色とりどりの大輪のばらがいっぱい描かれた折りたたみの傘に決まりました。

当日の会場は鶴岡会館でした。大勢の生徒達が集まりました。

先生は、ささやかな傘のプレゼントを大変喜んでくださいました。傘を広げてにつ

こりされ、次は上にかかげて下からバラの模様をご覧になり、「このバラの花ひとつ、ひとつは皆さんのお顔のようです。皆さんのお顔を思い浮かべて大切にします。」と云ってくださいました。

傘寿にしてこのコメント！

常に生徒を思いやる暖かい先生のお心配りが嬉しくて忘れられません。

それから後も幾度かクラス会にご出席くださいました。先生のお話は知性と教養に裏付けされ、その折、その折、適切な内容で、いつも「さすが！」と生徒の心に何かを残されました。

今、戸塚の家で下の子と一緒に暮らしているのですよ。男の子だから、私が毎日買い物をして食事の支度をして忙しいの。と眼を細めてお母様のお顔にられました。お母様として、おいくつになられても、お子様方を愛し続けられたご生涯でした。

思い出すままに

村田佐代子

はじめておば様にお目にかかりましたのは高校一年生の時でした。昨年の夏帰天された御長女明子さんから友人として紹介していただきました。

眉の濃い、睫の長い、大きな黒い目を細め、にこやかにやさしく御挨拶下さったのがとても印象深く、遠い昔のことですが、その眼差しは今も鮮やかに思い出されます。後で、鎌倉女学院（鎌倉高等女学校）の大先輩であり、又私の入学以前に教鞭を執っておられたことを伺いました。何時も御主人、有坂磐雄先生より一步下がって控えめで、謙虚でおられるおば様の姿勢は、私の目標・お手本でした。おば様が私の人生の中で忘れることの出来ない、大切な大切な方であられるのは、現在の私の「幸せ」を

でも、先生、「ごめんなさい。

先生は、私達生徒にとりまして、永遠に先生でいられますこともどうぞお忘れなく・・・

そして、星になり、風となって私達をお見守りくださいませ。（了）

下さったのが有坂磐雄先生であり、おば様であつたからです。明子さんのお口添えで、主人に引き合わせていただき、お忙しい中、度々お食事に招いて出合いの機会を作って下さいました。昭和三十年代に入ったばかり、まだまだ世の中が十分豊かでなかった頃のこと、そのお心遣いは並大抵の御苦労ではなかったと思います。自分が家庭を持つて改めてわかつたことでした。

結婚後、時折おたずねすると、いつも変わらず温かく迎えて下さり、「さあさあさあ」「まあまあまあ」の声にホッといたしました。あれもこれも聞いていただきたいと思っておたずねするのですが、お目にかかっただけで、何もお話しなくても心細み、そして何気なく人生の指針を示して下さい不思議な方でした。

又、尚綱会と云う同窓会の支部活動を仰せつかり、戸惑っておりました時、毎回必

ず御自分も出席して蔭から励まし支えて下さり、とても有り難く嬉しいことでした。

ここ十数年は姑の介護でお目にかかれず、ご無沙汰しておりましたが、御殿場へ移られた折、信雄様からのお葉書で、おば様の人生の中で一番ゆつたりとした日々を過ごしておられるように感じますとのこと、安堵しております。その後、七里ヶ浜に移られ、近くなりましたのに、お目にかかれる機を得ずしてお別れを迎え、悔やまれてなりません。

心豊かな人生を過ごされたことが、告別ミサのお写真に伺われ、とても慰められました。穏やかな、慈愛あふれたおば様の顔が、今もありありと思ひ出されます。又何時の日か、お目にかかれる日を思いつつアンナ有坂言子様、天国にて安らかに憩われんことをお祈りいたします。

有坂言子年譜

明治四十三年六月二十一日

松澤敬讓、勝子の三女として京都府加
佐郡舞鶴町に生まれる。

明治四十五年

鎌倉市浄明寺五六二に転居 (二歳)

大正六年四月

神奈川県立鎌倉師範学校付属小学校入
学 (六歳)

大正十二年三月

同小学校卒業 (十二歳)

大正十二年四月

鎌倉高等女学校入学

昭和二年三月二十五日

鎌倉高等女学校卒業、最後の学年を副級
長として過ごす。 (一七歳)

昭和四年五月六日

奈良女子高等師範学校第三臨時教員養成
所歴史地理科入学 (一九歳)

昭和七年三月二十五日

奈良女子高等師範学校歴史地理科卒業
(二二歳)

昭和七年四月(四月二十日付)

横須賀市諏訪尋常高等小学校代用教員

昭和九年三月二十七日

諏訪尋常高等小学校教員依願解職
(二四歳)

昭和九年四月六日
鎌倉女学院教諭（地理・歴史担当）

この間、満州、台湾へ旅行

昭和二十二年
鎌倉女学院退職、有坂磐雄（終戦時海軍大佐、当時旭電機工業（株）顧問）と結婚、鎌倉市材木座四一八番地に転居（三十七歳）

昭和二十三年四月
三男文雄誕生（三十八歳）

昭和二十五年七月
四男信雄誕生（四十歳）
鎌倉市浄明寺五六二に転居

昭和三十三年五月二十五日
長女明子、大出隆久と結婚（四十八歳）

昭和三十五年五月十五日
次男芳雄、梶田恭子と結婚（五十歳）

昭和三十九年九月二十四日
長男英雄、望月昌子と結婚（五十四歳）

昭和三十九年十一月一日
次女恭子、漆原隆一と結婚（五十四歳）

昭和四十五年四月二十五日
夫磐雄 死去（享年六十六歳）（六十歳）

昭和四十六年四月
鎌倉市材木座六ノ六五〇に転居
御殿場高原病院に入院（八十七歳）

北鎌倉女学院講師（四月一日付「礼法」担当）（六十一歳）

平成十四年十一月
七里ヶ浜ホームへ転院（九十二歳）

昭和五十二年三月三十一日
北鎌倉女学院退職（六十七歳）

平成十五年十二月三十一日帰天（享年九十三歳）

同年
横浜市戸塚区深谷町大正団地に転居

同年 九月十八日
三男文雄、川森博子と結婚

昭和六十一年四月
横浜市栄区笠間町六一に転居（七十六歳）

平成九年五月
カトリック雪の下教会で受洗（洗礼名ア

編集後記に代えて

(葬儀ミサでの親族挨拶「三男文雄」)

今日は皆様大変お忙しいところ、しかも三日も明けただけというときに、母のためにお集まりいただきまして誠にありがとうございました。母のこ数年間と、亡くなりました三十一日の様子についてご報告させていただきます。

母は六年前の九七年に御殿場高原病院に入院致しました。高原病院では院長先生を始めスタッフの方々に大変お世話になりました。母は記憶は大変衰えてしまいましたが、私共が参りますといつも喜んでくれました。特に昔のことは意外と覚えておりましていろいろと会話を楽しむことができました。

高原病院は富士山の麓にございまして、晴

して少しずつ血圧が下がって参りました。亡くなります二―三時間前に、ほとんど意識はなかったかと思いますが、私共がベッドの傍らでいろいろと呼びかけますとそのたびに目を開けてそれに答えてくれるように見えました。最後は本当に穏やかな表情で午後十時四十一分に私達の見守る中、静かに息を引き取りました。

この数年の間、兄弟姉妹が連絡を取り合いながら(注1)母を支えて参りましたが、その間もずっと感じておりましたのは、確かにある意味では私達が母を支えていた訳ですが、母は私達にそういう機会を与えることによって、母の最後の仕事として私達兄弟姉妹の絆を深めていくれたのではないかということでございます。母のおかげで私たちの絆がさらに深められたと思っております。

れた日には富士山が間近に見えますので、よく富士山の見える二階の談話室に行きまして、そこで一緒に富士山を眺めたり致しました。

御殿場では本当によくしていただいたのですが、なにしろ遠いものですから、いつかもう少し近くに帰ってこられないものかと思っております。幸い一昨年(十一月)に、この七里が浜ホームに入れていただくことができました。こちらでも今日いらして頂いております施設長の佐間田様を始め担当の方やスタッフの方々に大変よくして頂きまして母も幸せだったと思います。

昨年十二月に入りまして肺炎を起こしてこちらの病院に入院致しました。十二日でしたか一旦退院致しましたが、翌十三日には再発しまして再び入院することになりました。その頃から若干元気がなくなってきたように思いました。三十一日も午前中は特に変わったことはなかったようでしたが、午後になりま

ひとつ心残りなのは、母のことで相談もし、精神的な支えにもなってくれていました一番上の姉の明子が昨年の夏、母に先立って逝ってしまったことでございます。姉と一緒に母を見送ることができなかったのが残念ですが、しかし、今頃きつと母は姉と天国で再会の喜びを味わっていることでありましょう。

この間、多くの方々から励ましやお祈りをいただきました。この場をお借りして皆様からお礼申し上げる次第でございます。

本日は本当にありがとうございました。

注1

兄弟姉妹は病院を訪れる度に長男英雄に母の様子を報告することになっていました。英雄は毎月これをまとめて収支報告と共に兄弟姉妹に郵送していました。この「御殿

場高原病院関係ご報告」、「七里ヶ浜ホー
ム報告」は母が亡くなるまで続きました。

参考資料

教員免許状

第三臨時教員養成所卒業者

女子師範学校

師範学校女子部

高等女学校

神奈川県

松澤言子

歴史

地理

右教員免許令第三条ニ依リ頭書

学科の教員タルコトヲ免許ス

昭和七年三月二十四日

文部省

免第一四二五七号

日本帝国臣民ニアラサル者ニ対シテ八私立

学校ニ於イテノミ有効トス

松澤言子

横須賀市諏訪尋常高等小学校代用教員ヲ
命ス

月俸金四拾円給與ス

昭和七年四月二十日

横須賀市役所

小学校教員免許状

松澤言子

右者小学校本科正

教員タルコトヲ免許ス

昭和八年六月一二日

神奈川県

神無第九九一号

諏訪尋常高等小学校代用教員

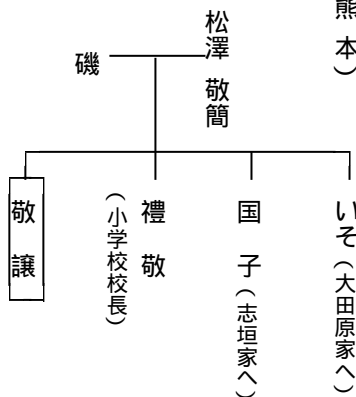
松澤言子

月俸四拾五圓給與
依願解職

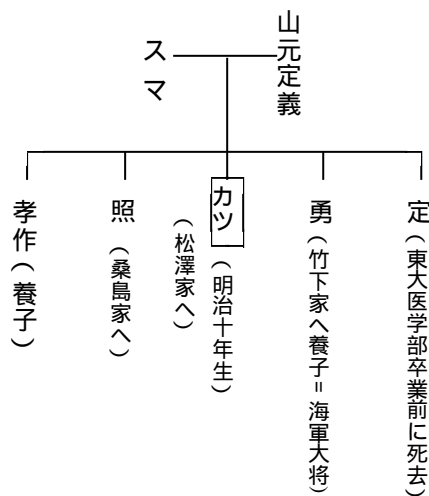
昭和九年三月二十七日
横須賀市役所

参考資料

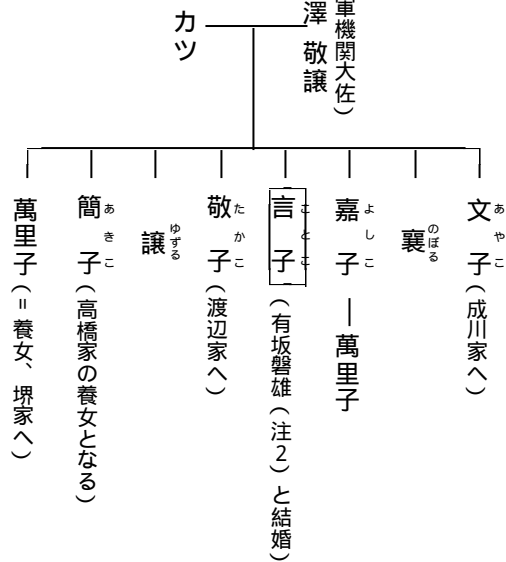
(熊本)



(鹿児島)



(海軍機関大佐)
松澤 敬讓



注1 言子の母の名前、「カツ」(勝)は生年の明治十年が西南戦争に当たり、戦勝を願ってつけられたものという。

注2 有坂磐雄 終戦時 海軍大佐 (兵学校五十一期生)、東北帝大八木研究室で無線工学を学び、終戦までリーダーの開発に携わる。日本のアマチュア無線第一号。ニューヨーク駐在武官。戦後、旭電機工業(株)嘱託、栄光学園講師を務めた。

追憶 (花と鳥と歌と)
非売品
発行代表者 有坂英雄
編集 有坂文雄
二〇〇四年一月三十一日

